



Title	南方熊楠と猫とイスラーム
Author(s)	嶋本, 隆光
Citation	日本語・日本文化. 2015, 42, p. 1-33
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/56914">https://doi.org/10.18910/56914</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

## 南方熊楠と猫とイスラーム

嶋本 隆光

### はじめに

紀州の熊楠といえばおもしろい。無類の猫好きで、食べ物が十分になかった留学時代でも、猫を飼っていた。子猫を下宿に連れて帰ったり、「天ぶら屋」の猫の観察、さらに、近所にいた宿無しの猫にえさを与えるなど、「日記」には猫に関する記述が散見する<sup>1)</sup>。日本に戻ってからの話であるが、熊楠はやはり猫を飼っており、娘の文枝の言葉によれば、「三毛猫も白黒のも、いつも牛肉をやるものですからコロコロ太っていたそうですよ。」<sup>2)</sup>「……そうですよ。」というのは、直接見たのではなく、猫嫌いの母親から聞いた話だからである。本稿の後の話にも若干関わってくるが、猫にも役割分担があって、夜中に粘菌に近づくナメクジを追っ払うのだそうである。人類の歴史でその魔性を嫌われたこともあったが、穀物を食い荒らす鼠、さらにサソリや蛇などを駆除することから、猫は益獣と見なされていた。ペットとしても飼われてきた。

熊楠は子供の頃から絵が上手で、『和漢三才図会』を記憶に頼りながら写した話は有名である。ただ、熊楠の猫の絵は格別におもしろい。土宜法龍当ての書簡の中でも、スペンサーやダーウィンの原子に関する説を批判しながら、「……予にいわずときは、生物現身の原子には先祖代々の業を積みりといふに止まる。業は何物にして何の形ぞといはば、吾れ吾れ一生のことをいかに忘れてたりとも、機に応じて思い出し又夢見又は熱病中に現する如く、別に更に小さき原子もなにも有するにあらず。原子にはここ先祖伝来の経歴事相を再現する力あるものと説くをよしとす。」<sup>3)</sup>と述べ、あの有名な猫の絵を描いて説明した(図1)。これ以外にも、猫の戯画を描いて人に与えることがしばしばあった<sup>4)</sup>。



図 1

その熊楠が1912年、柳田の勧めもあって「猫一疋の力に憑って大富と成りし人の話」（以下「猫」）という興味深い論考を表している。元々はイギリスで発行された *Notes and Queries* 誌（以下 *N&Q*）に1911年発表することになっていたものを、日本語に書き直したのである。というより、柳田との往復書簡を見れば、日本版と英語版はほぼ同時進行であったことがわかる。すなわち、1911年10月25日に英文脱稿とあり、同日午後の手紙では、日本語原稿を書留で送ったと述べている。その後、同11月12日には、『太陽』に発表されることになったことに礼を述べている。次いで、12月14日、ロンドンで英語版が出た報告をしている。そして、無事『太陽』に出たことについては、1912年、1月17日に謝意を表している。おそらく日本における全国誌でのデビューとなった記念すべき論考であった。ただ校正などについては、柳田に任せきりの状態であった<sup>9)</sup>。

このように紆余曲折を経た論考ではあったが、この論考を精査すると注目すべき、あるいは検討すべきいくつかの問題がある。つまり；

①人類の文化の発生について、それは伝播したのか、独立に発生したのか、

②熊楠の資料の用い方、

③この論考の論拠となるイスラーム世界の位置づけ、(特に猫を媒体として)、

①については、この論考の出発点が後述するクラウストン (Clouston) という人物の著作の示唆に基づいている点を考慮すれば、少なくとも「猫」は、熊楠が伝播説を支持していることは明らかである。勉強家の熊楠のことであるから、伝播説、独立発生説の意味を知っていたことは言うまでもない。それどころか彼の知の追求の道における主要なテーマの一つであった。この論文に先立つ「西暦九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語」<sup>6)</sup>においてもこの問題を扱っていた。ただ、①の問題は本稿で扱うには大きすぎるため、また筆者の調査領域がイスラーム、さらに細かくイランのイスラーム (12 イマーム派シーア主義) であることから、③に重点が置かれることになる。ただ、同時に②の問題は必然的に関わってくるので、結論のところで簡潔に触れることにしたい。

熊楠がかなり強い関心をイスラームに対して持っていたことは、土宜法龍苑の書簡ならびに、民俗学関連の論考 (特に、『十二支考』) を見ても、容易に知ることができる。本邦では、鈴木董によって、熊楠とイスラーム、特に氏の専門領域であるオスマントルコとの関連に注目しながら書かれたエッセーが発表されている。これを見れば、熊楠が相当広範囲にイスラーム関係の資料を読み漁っていたことを知るができるだろう<sup>7)</sup>。さらに、筆者が20代に読んだヴァンペリー『ペルシア放浪記』が、いわゆる「ロンドン抜書」の最初に出てくるのも何かの縁を感じる<sup>8)</sup>。

さて、筆者は「猫」において、イスラーム教徒の間で猫が愛好されていて、この点が熊楠の論考においてきわめて重要な論拠となっている点に興味を覚えた。熊楠の個人的な猫びいきの要素はともかく、この点を検証してみようと考えた。この作業によって、②の点についてもある程度の考察を加える機会となろう。丁寧に熊楠の用いた資料を再検討することによって、熊楠の学問の性質、本人の学問の目指した目標などについて、多少なりとも新しい情報が加えられるかもしれない、と考えたのである。

## (1) 前提的考察—Whittington 譚とクラウストン

Whittington の物語とは、熊楠が *Webster's International Dictionary of the English Language* (1896) に基づきまとめた要約によれば；

この物語の大概は、「ジック（リチャードの略）・ホイッチングトン少にして孤なり。富商サー・ヒュー・フィッワレンの厨奴たり、主厨に虐せらるるに堪えず、脱走せしが、道側に息んで、ポー寺（ロンドン）の鐘音を聞きしに、ホイッチングトン主家に還らば、三たびロンドン市長たらんというがごとし。よって、主家に還る。その後ほどなく、主人の持ち船出航にのぞみ、ホイッチングトン、唯一の所有物たる猫一疋を船長に委託す。その船バーバリーに至りしに、国王宮中に騒多きを憂うる最中なりければ、高価もて猫を買えり。船帰るに及び、ホイッチングトン猫の代金を受け、商売の資本に用い、大富と成り、主人の娘を娶り、その業を継ぎ、男爵に叙せられ、三度までロンドン市長と成りし」となり……<sup>9)</sup>

この話は当時ヨーロッパで広範に知られていたようである。たとえば、熊楠が寄稿した *N&Q* においてもしばしば読者から Whittington に関する文が投稿された。このテーマが注目されていたのは、19 世紀の大英帝国の世界制覇と関連があると思う。自国がいつの時代どの地域にまで影響力を持っていたのか、というイギリス人の好奇心と自信と関係があった。同時に、世界観の変化に伴って、新しく知られた地域や民族の相互関係にも目が向けられていた。同世紀の後半には学問的関心がさらに進展したのである。中でも熊楠が強い関心を寄せていたのが、クラウストン (Clouston) という研究者であった。

増尾伸一郎によると、W. A. クラウストン (1843～1896) は主に中東の物語と翻訳に従事したが、同時に比較民俗伝承に関する著作を公表した。彼の立場は伝播主義学派であって、ヨーロッパ全土に何世紀にもわたって広まったアーリア族の物語の基となる伝承が生まれたインドに注目していた、という。「それまでの社会進化論者とは異なり、原始の着想を追求して有名な物語や習慣の中に未開で原初

的な風習の遺物を求め、仏教の寓話や中世の道徳的逸話、インドとアラブの物語本……」<sup>10)</sup>などに現れる物語の跡を追った点が指摘されている。独学でアラビア語を学んだという。クラウストンは注意を東方に向けるが、インドがその行き止まりであって、「……ヨーロッパにもアジアにも残る太古の物語は、迷信的要素が全くない日常的な物語を別にすれば、空想物語は翻訳を通して、また旅行者や巡礼者、そして貿易商人らによって東から西へと、比較的近世に伝わったものと考えた。」<sup>11)</sup>

率直に言って、熊楠の「猫」は、クラウストンの上記の考えがなければ立論できなかったほど、その多くの部分を彼の著作に負っている。その著作とは、*Popular Tales and Fictions*, London, 1887である。そもそも事の発端は、三度までロンドン市長になった Whittington の話の起源について、クラウストンがインド起源説を主張したことである。

既に述べたように、この話はヨーロッパで広範に知られていた。1830年代に *N&Q* 誌において何人かの投稿者によって「熱い」議論が交されていた。ただ、クラウストンや熊楠のように伝播説や独立発生説などに対する関心ばかりでなく、議論は Whittington の話が歴史的に真実であるか単なる物語であるかという関心加わっていた。この議論を巡って、歴史的地理的な議論がなされた。

そもそも Whittington と彼の猫の話は、17世紀に初めて登場するという。この話は19世紀になって、イギリスの東方進出による勢力圏の飛躍的拡大ともあいまって、様々な形をとって議論されるようになった。その代表的なものが *N&Q* で展開された Keightley の *Tales and Popular Fictions* の主張に対する Samuel Lysons からの反論であった<sup>12)</sup>。論点は、Keightley が Whittington と猫の話は、世界中に類例のよくある話で、世界の人々は自らの生活環境や条件に従って独自の話を「独立して」作り出すものだ、と主張したのに対して、Lysons がこの話は史実によって裏付けられる実話であることを主張したことである（1861年4月以降、両者の間で投稿が繰り返される）。この論争が真に重要であったかどうかはともかく、19世紀のイギリスでは、猫論争がある程度なされていたのである。

クラウストンはこの流れの中で、1887年上記の書物を著し、物語の伝播説を強く唱えたのであった。クラウストンはこの書物を執筆していた段階において確

実な根拠は見いだしていなかったものの、いくつかの理由で猫によって富貴になった人物に関する話の起源は確実にインドであることを予測していたのである。おそらく当時のイギリスの帝国主義的拡大、自国民がインド人との同人種のアーリア系民族であることの発見などの風潮を受けていたと推測される。熊楠はクラウストン説を受けて、彼の予測が確かであったことを明らかにした、というのが事の真相である。

さて、熊楠は不本意ながらイギリスから帰国後（1900年）、那智山中で尋常ならぬ体験をする。当時の日記を見れば、植物や粘菌の採集やプレパラート作り之余念がなく、イギリスとの関係は *N&Q* を中心に行われていた印象がある。ただ、「履歴書」を見れば、「さびしき限りのところゆえいろいろの精神変態を自分に生ずるゆえ、自然、変態心理の研究に立ち入り」<sup>13)</sup> などと書いている。おそらく意に反してイギリスを離れた無念さや未練が強く残っていたのであろう。特に、「とって置き」の「燕石考」<sup>14)</sup> が『ネイチャー』ならびに *N&Q* に採用されなかったのはショックであったと推測できる。1903年9月22日の日記には、*N&Q* に「燕石考」が載った夢を見たときと言っている<sup>15)</sup>。とまれ、那智での精神的不安定、失望の時代を何とか切り抜け紀伊田辺に落ち着くようになった熊楠は、『大藏経』を丁寧に読み、多くの比較伝承学的資料を収集することができた（1911年4月から抄写）。

猫の話が熊楠の注意を強く引くようになるきっかけは、1910年版の *Encyclopaedia of Britanica* によると未だにこの話の原話論争に決着がついていないことを知ったことであるという<sup>16)</sup>。帰国後、和歌山の町を離れ熊野方面にいた熊楠が「猫」を書く時の状況はこのようであった。

この時期に相前後して、熊野・那智に逗留中、前記 *Popular Tales and Fictions* を丁寧に読んでいる（1904年2月から3月にかけて、2冊を2週間程度で読んだ）。この間の事情は増尾によって日記の記述が紹介されている<sup>17)</sup>。かなり集中的に時間をかけて読んでおり、南方熊楠顕彰館に保管されている蔵書を調査すると、多くの書き込みのあることがわかる。もちろん、Whittington に関する箇所ばかりではなく、全体に渡り相当な書き込みがある。クラウストンの主張する比較説話や

仏教の影響との関係で考えさせられるところが多かったのだろう。この頃に「猫」の草案が準備されたのである。同時に、「小生にとって置き」の「燕石考」の不採用と相前後しているので、この頃の熊楠は、失望と落胆の極限にあったのではないかと推測できる。それにもかかわらず、まもなく始まる「神社合祀問題」に巻き込まれるまで、次々と新作に取り組んでいるようにも見えるのは驚きである。むしろ、投稿は生き甲斐であった印象すらある。

1909年頃から、「神社合祀反対」の運動に積極的に関与する局面となり、民俗学の分野での研究の進展という意味では、彼のエネルギーは「浪費」されたのかもしれない。その一方で、熊楠が柳田に援助を求めたことによって、我が国の民俗学研究においては予期できぬ進展が見られることになった。両者にどのような動機があったにせよ、主として書面を通して日本を代表する二人の学者が、知り合うことになった。その交友の一つの結果として、熊楠が「猫」を公表することに対する柳田の勧めがあったのである。では熊楠の論考の趣旨は何か。上記の通り、彼は「猫」を我が国で発表する前年、*N&Q*において、二度に分けて「猫」論文の大要を既に明らかにしていた。そのポイントは；

(*Notes and Queries*: 11th series.-volume IV. July-December, 1911, December 23 and December 30)

- ① その後、クラウストンの期待通り、Whittingtonの物語の起源と推定される伝承がインドで発見されたか
- ② 1910年現在の*Encyclopaedia Britannica*にはこの点に関する記述がまだない
- ③ 自分は『大蔵経 the Buddhist Canon』に明らかに仏陀と同時代のインドの物語を見いだした。それは遅くとも彼（仏陀）の没後数世紀内に記録されたものである
- ④ この物語はクラウストンが探し求めていたWhittington譚の元となる物語であると無難にいえるだろう（以上、論考の前半）
- ⑤ インドでは猫が嫌われている事例、その事例はBrahmanismから仏教にも伝えられた。中国でも例外はあるものの、同様の内容を持つ資料がある。
- ⑥ これに対して、イスラーム世界では全く逆の事例がある。ムハンマドが猫の昼寝を妨げないように、袖を切って礼拝に出かけた話、さらにBaumgartenの

*Voyages and Travels* (1732) からの情報（ただし、これは Churchill からの孫引き）など。

- ⑦ そして、最終結論として次のように述べている。

Now that I have given the old Indian legend of the Rat-Money-Broker, and have also exposed the different feelings with which the cat and the rat were respectively regarded by the Buddhists and the Muhammedans, I am led to opine in conclusion that the original Buddhist tradition of the Rat-Money-Broker was obviously metamorphosed into the current European tale of Whittington, primarily after the Muhammadan had handled it. Their particular fondness for the cat, the animal much hated by the Buddhists, caused them to substitute it for the rat, whereas several other features remain the same in both of these stories-such as the hero's early poverty and sadness, his acquisition of matchless wealth through the sale of an animal and through navigation, his subsequent marriage with a damsel whose father had before been unkind to him, &c.<sup>18)</sup> (以上後半)

私が古いインドの伝承鼠金舗主の話を述べ、さらに猫が仏教徒とマホメット教徒によってそれぞれ捉えられている感情についても明らかにしたことから、次のように結論できる。すなわち、鼠金舗主の元となった仏教伝承は、明らかに形を変えて現行のヨーロッパのホイッチングトン譚となったが、それは主としてマホメット教徒の手を経てからのことである。彼らが、仏教徒が非常に嫌った動物—（すなわち）猫をことの他好んだために、猫を鼠に代えてしまったのである。その一方で、その他いくつかの点は、両者の話の中で共通点として残っている。例えば、主人公が初期の時代に貧困で惨めであったこと、猫と航海によって比類なき富を獲得したこと、最初は親切でなかった父親の娘とついに結婚すること、などである。（筆者訳）

この結論を読む限り、熊楠は相当自信があったに違いない。そして、その自信の根拠は『大蔵経』の記述を発見したことにあるように見える。論考前半部分の大

半は『大蔵経』の該当箇所をの翻訳・紹介に使われている。N&Qに掲載された論考と邦語論考の引用を比較して見ると、訳語などにおいていくつかの特徴が見られる。では次にこの発見の内容を検討してみよう。そして、上記⑦の結論にどれほどの根拠があるのかについて検討を行いたい。

## (2) 『大蔵経』「義浄訳；根本説一切有部毘那耶、卷32」の記述

それでは熊楠が『大蔵経』に見出した箇所を検討してみよう。もちろん長い本文の内容を逐次検討することは、筆者の目的ではない。その内容と熊楠の論点を明らかにすることが目的である。さらに、原文と英文翻訳を対比することによって、いくつかの問題点を指摘したい。漢文ならびに英文翻訳は本稿の中で参考資料として逐次掲載してあるので、参照されたい。

昔ある村に富人がいて、船による貿易で大利を得ていた。妻もあり子供もいたが、妻に大金を与えろくな事がないと考え、知り合いの一人商人に全財産を預け、家族に何かあった場合に助けてくれるように依頼した。やがてこの貿易商人は難破して命を失う。妻は苦勞して子供を育てたが、子供が父親のことを聞くと、父親と同様船貿易を行い同じ運命をたどることを嫌い、真

娶妻未久便生一子、容貌端正廣說如前、告其婦曰、賢首、吾今有子費用處多、欲往海中求覓珍寶、妻言隨意長者便念、我若多留財物與婦人者、此必驕奢恐造非法、遂便少與、於此聚落有一商主、是其知識、持餘財貨皆悉寄之、告云、今欲經求還期未卜、我婦若於衣食有乏當可給濟、即持財貨入于大海、遭風破、船往而不歸、被寄之人不為存念、時長者婦假親族力、及自營為養育其子、年漸長大問其母曰、我之、父祖作何生業得存家道、母作是念我若報云入海與易、或恐此子亦往海中、遭難不還我受孤苦、遂即報云、汝之祖父於此與易以為活命、子白母曰、可與錢財我學與易、母告之曰、我於何處得有錢財、但假宗親資力養汝、更無餘物遂汝所求、然某甲商主是汝之父故舊知識、可從覓物隨意經營、其子聞已詣商主處、時商主家有人取錢、三返失利、彼正諒實、求入無因、其家婢使持糞掃出、中有死鼠、俱欲棄之長者恨恨告取錢人、汝今知不、世間有人解求利者、能因此婢所棄之鼠產業豐盈、彼長者子遙聞是說便作斯念、此大商主終不虛言、豈不由此死鼠能得富樂、即隨婢使視其住止、婢以糞鼠棄于坑內、童子取鼠詣大市中、見有飢貓繫頭於柱、以鼠示之、彼貓見鼠遂便跳躑、是時貓主告童子曰、可與死鼠、童子報曰、豈以空言便覓他物、若酬價直我當與鼠、貓主便以一捧豌豆用酬其直、是時童子留鼠取豆便於瓦上熬之令熟、即作是念、我若盡

実を述べなかった。ある日子供が自分は商売をしたいと言ったので、父親の知り合いの商人を紹介したため、子供は父のかつての友人の商人の所へ行った。すると、ある商売に失敗した人がくだんの商人に厳しくしかられているところにたまたま出くわした。「汝 知らずや、金儲け上手なものはこの下女が捨てに往く鼠一匹を資本としても、大身代を仕上ぐる」とののしっていたのを聞いて、もっともだと考え、その捨てられた鼠を拾って町に行った。すると、猫を飼っている人が猫のえさとしてその死鼠を所望したので与えたところ、代わりに豌豆をもらった。若者はこの豌豆を熬って水と共に村はずれの樵夫が来る場所へ行った。若者が樵夫たちに豆と水を与えると大変感謝され、代わりに薪をくれた。彼はこの薪を町で売り、さらに多くの豌豆を買い同じ所へ持って行った。これを繰り返した結果、利益を増やしたが、いつまでもこのような仕事はよくないと考え、今度は雑貨商を始めた。更に利を増やしたがこれも好ましい仕事ではないとして、香具屋、さらに両替商へと事業を拡大し、巨利を得た。同業者は彼を妬んで、「鼠金舗主」とあだ名した。同時に同業者たちは彼の父親のかつての事業の話をしたので、帰宅して母親に問うたところ、母はいかんともするなく真実を告げた。すると息子は父親同様自分も海に出て珍宝を得ると言い張ったため、母はついにこれを許した。その結果、若者の事業はことごとく成功を収め、大富無双となった。母親は息子に今や妻を得るよう勧めるが、その際他人に負債がないか訪ねた。そのとき、息子は昔例の商人から聞いた話を思いだして、金銀玻璃瑠璃の四宝で鼠を作り、銀盤の上に砂金を敷いてその上に鼠をのせて商人に献上した。商人は大いに驚いてあなたに金を貸した覚えはないと答える。これに対して若者は死鼠の話をし、又自分の父の名を商人に知らせた。ここに至って始めて、商人はこの若者が友人の子供であることを知り、ついに自らの長女を彼の妻として与えた<sup>19)</sup>。

筆者が英語本文を精査した印象から言えば、熊楠がN&Qに寄稿した理由は『大藏経』に死んだ鼠の話を見いだしたことにつきるようだ。そして、インドの説話がイスラーム世界を介してヨーロッパと結びついていると確信した、この「新し

い発見」、言い換えればクラウストンの仮説の正しかったことを自ら発見したことを誌上に明らかにして、新たな議論の材料を提供しようとしたのだろう。しかしながら、発表直後のN&Qに早速新情報が読者から寄せられた。そのポイントは、熊楠が『大蔵経』原文を翻訳紹介した内容は、『ジャータカ』や『カリーラとディムナ』などにおいてやや変形された形ではあるが存在することを指摘するものである<sup>20)</sup>。もちろんこの指摘は、熊楠が独自に Whittington 譚の原型と思しき話を発見したことの価値を下げるものではないが、死んだ鼠が原因になって富裕になった人の話は既に知られていたことになる（現在のインドではかなりよく知られた話らしい）。問題はその解釈である。そもそもこの問題は、死鼠の話がヨーロッパに到達して Whittington 譚になる過程でなぜ猫になったのか、そして元の話の起源はどこにあるのかという問題が存在したことであり、もしこの点だけが重要なのであれば、インド起源を示す（少なくともインド起源を知る）ための資料は、熊楠が気づかないところにも若干形を変えて存在したということである（熊楠は当然『ジャータカ』の存在は知っていたが、たとえば高木敏雄との「書簡」などではこれを軽視している。奇妙なことは、後に「鼠一疋持って大いに富んだ話」<sup>21)</sup>では、『ジャータカ』を資料として用いている）。ただし、問題の所在が解釈なのであれば、話は異なった様相を見せる。つまり、Whittington の話の起源がインドにあるらしいことは、既に述べたとおり、クラウストンが予測を立てていた。さらに、後述するようにイスラームが絡んでいることについても予測は既になされていた。熊楠は伝播説の立場からクラウストンの仮説には大筋同意しているのであるから、彼の業績は「独自に」『大蔵経』にクラウストンの仮説の根拠を見出したことであり、この話が、Whittington の話と直接結びつく、と結論づけたことである。つまり、死鼠の話が Whittington 譚の原型に相違ないと解釈し、断言したことである。

その結論に至る論理展開のなかで重要な根拠がイスラームであった。熊楠はイスラーム教徒が猫好きであることを大前提としていた。では、イスラームでは熊楠が述べるほど猫が愛好されているのだろうか。この点を検討する必要がある。これが次節からのテーマである。まず、クラウストンと熊楠の情報源となっている Sir Gore Ouseley, *Biographical Notices of Persian Poets*<sup>22)</sup>、であるが、本書はペル

シアの歴代の著名な詩人を中心にそれぞれの代表的作品を通して紹介した作品である。Ouseley 自身は外交官であったが、ペルシア語に通暁していた。フェルドゥシー（934-1025）、サーディー（1184?-1291）、ハーフェズ（1326/7-1388/9）など、ペルシアの大詩人の作品が翻訳・紹介されている。本書では、それぞれの詩人や歴史家の著作を Ouseley 自ら翻訳したものを掲載している。ただし、Keightley が指摘するように、その翻訳は抄訳であるので、紹介の仕方にやや問題がある。いずれにしても、クラウストンが本書を用いたのは、*Popular Tales and Fictions* の引用がほぼ Ouseley の原文そのままの形で引用されていることで明らかである<sup>23)</sup>。そして、熊楠はクラウストンの引用を孫引きしている。「孫引き」したであろうことは、Ouseley が物語に出てくる島名を Keis と表記しているのに対し、クラウストンはこの語だけを Kays と表記しており、熊楠は論文で、「カイス」と表記していることから判明する。ただ、余談であるが、熊楠が Abdullah the son of Fazlullah の Abdullah をアヴァズラという表記しているのは非常に奇妙で、なぜ熊楠がこのような音写を行ったのか不明である<sup>24)</sup>。では次節でこの書物に見られる記述を紹介検討しよう。

### (3) 『ペルシア史 (*Tārīkh-e Mo'ajam*), *Tārīkh-e Vassāf*] の記述

#### Ouseley による紹介（ペルシア語原文）<sup>25)</sup>

熊楠の「猫」を結論に導く上できわめて重要な位置を占めると考えられる『ワッサーフの歴史（ペルシア史）』の内容は次の通りである。

ファズロッラーの息子アブドッラー（Abd al-Lāh b. Fazl al-Lāh）によって1299年に記された『ペルシア史（ワッサーフの歴史 (*Tārīkh-e Vassāf*)』によれば、Kaisar の長男 Kais は、母親と二人の兄弟と共にイラン南部の海港シラーフに住んでいた。シラーフはペルシア湾で最大の繁栄していた町であって、学者や商人たちが数多く居住していた。支配者も時々この地に宿営し、「象の家 *fil khāneh-ye 'azad*」といわれる高い建物を建てたとと言われる。しかしながら、事情あってシラーフから離れた島（カイス島）に兄弟3人は

از پیش برخواست پادشاه حاضر نماید صفای روحی و جسمی او را و لایعاً نرین نماید و خواست تا از مرجم آن چهارمی واجب دان  
 نظر کرد و در خواب و اطراف بارگاه گهلو پیش میگردید چون خوان نهادند بعد پیش میگردید که پادشاه حاضر بودند یکی بسیار بود چو  
 در دست گرفت و مرمر از طلا و دیگر در دست که بسیار حمایت است از آسیب پیش پیش میگردید شد و با خود گفت چنانکه  
 و عمار آن عجز با ضرورت سنجیح سنجیح بر نشین اجابت طیران خواهد کرد و بدین ویلست بقیه عمر را خود و فرزندان از نصیب  
 بیچارگی بخت تنم و اسودگی تشکر با ادا و انبساط و غنیمت **و جبار العظیم لکسیر المهنین** چون از نعلها و غنای  
 شده اند از اجازت خواست بر عادت ارباب سفارین پارسه خدمت و قماش آمد روز دیگر را چون طلوع صبح بادبان بنا شد  
 و در وقت ازین آفتاب بر بزم خضر آسمان روان گردید باز در گان فرمود و اگر بر او نفسی سپیدند و متوجه قصر پادشاه شدند و در پناه  
 سخت کرد بر اهل گن که در اینده چون چشم گردنیدند و بر کثرت مرشان افتاد و پیش مرصه شده و فرود شده بود احوال طبیعت  
 حرکت آمد بیکت که از بصر چندین را بعد دست و وصلت ناب و چنگال مجرایانید مرشان حدت ناب کرد که در زهر آ  
 ایشان بود یافتند و در هزاره میگردید که در کوه نیز سیال بر ناله و گال که از شب القاصدین در شبها گنگا آهسته میگردید و بهر سو می  
 و یکسخت و زخمور و نخست ناگردد قدم او در با لاین عدم باز نهادند بقا که حالت اشته و نظایر مشا به و گردند از دست  
 حملات و فرط صولات او چاشنی گرفت پای گمان در نوزاد با سولح که گنجد که به چنان در اطراف قدر طوفی سپید کرد  
 و در عقبه که از مرش احساس می افتاد و چنگال فروری برد و چون شیر عربین می خرید پادشاه با جازران نماید روز تفریح آن که  
 یکت حملت شیر دل میکردند در فایت بنامش از بار گان نوال فرموده که این چه نوع حیوان است بین جلادت و جلالی  
 در کدام زمین باشد خدا از سر و بعد وجد بعد از شاه و دعا و عید خد خدمت بر زمین نهاد و گفت این حیوان حدت مرش  
 و برایشان نیکت چیره و غالب باشد نام او با کسی که بیست و عرب آنرا سوز خورشید و تکلیک الفار و عقابا است این چون  
 شاه نیز عظم با قامت و دلیل محتاج باشد و در اکثر بلاد معسکون این حیوان موجود است و واقع مرش تا این بند  
 نمی پرسید که بگمان این درگاه و بیخ خواهد پشد یا مثل چنین حیوانی در حساب آمد چنگام نهفت پرنی آنرا بجای فرستاد  
 مگر در عرض آن محقر فایده رسد پادشاه آن تخم را اجبرل مقبول فرمود و اشارت داد تا بسم در خول خروج و دیگر تکالیف  
 از وقت جازاد است و سطر کند و در بر شریف قطع و فواخر صلات مشرف گردانید و مقربان حضرت علی مدته بهر بیستی  
 فواخر حال از نانی داشتند اما بعد بصاعت خود را بفراخ خاطر زیادت از قیمت مثل بفرخت و همسخه که لاین فرزند کرد  
 و بصاعت اطراف این دیار بود و خرید و تا موسم مراجعت بتبذیر اسباب و تحویل طرایف مشتعل شد چون موسم سفر در سیه  
 و از ترتیب نداد و اوست مصالح فایز گشت و جازرات را کلکل کرد و شنید و فضا سها که او انی آب بند چون دیده  
 عتاق از اشکته لال ساخت بخیزد پادشاه شافت و دستبوس و داع کند با خود گفت منشی بخت آن ضعیف میداند  
 که چه مقدار باشد و باصناف او را از خانه خود شنود می تو از هم جبت از چنگورت حال بسامع علیا رسیده و متاع او

۵

۱۰

۱۵

۲۰

۲۵

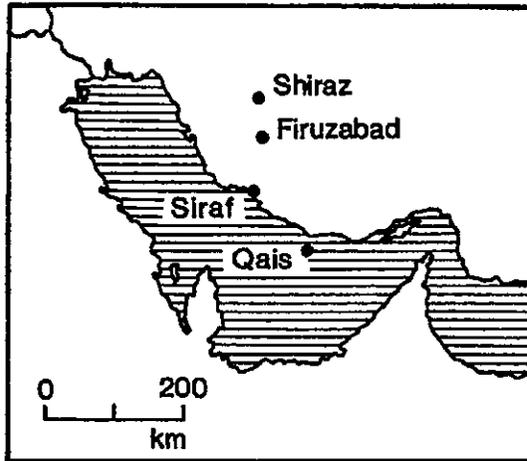


図 2

移り住んだ。カイス島は、現在ペルシア湾内の大きな島で、インド、中国、トルコ、エジプト、シリアなどの国から多くの商人が訪れる。しかしながら、昔は人の住まない島であった。

さて、年老いた母親はシラフに残された。その地域では船の船長が海外へ貿易のため出航する際、人々から何か品物を預かりそれを先方の土地で売り、その利益を人々に与える習慣があった。一方、人々は船長のために航海の無事を祈った。さて、あるとき航海に出かける船長が貧しいカイスの母親のもとにもやってきて、何か委託するものはないかと尋ねた。彼女には猫一匹しかいなかったのので、それを船長にあずけた。船長は出立し、インドのある町にたどり着いた。そこで現地の王と取引を行うべく、その支配者に接近した。王は船長（商人）を王宮に招き入れ、晩餐会となった。盛大な晩餐の席が準備されたが、奇妙なことに食べ物の傍らに棒を持った召使が控えている。これは食べ物がもたらされると多くの鼠が現れ食物を食い漁るので、これを撃退するためであった。船長はこの時カイスの母親から預かった猫を思い出した。早速猫を連れて来て放つと、猫は多くの鼠を撃退し殺した。王は大変喜んだ。船長はこの猫を王に捧げる際に、あの貧しい女の話をした。

王はこれに対して、多くの宝物を与え、船長はそれを携えてシーラーフに戻った。老婆は事の次第を知り、早速カイス島にいた息子たちを呼んだ。息子たちは母親のもとに戻ったが、結局カイス島を中心に海賊などの活動を行いながら勢力を拡大し、一王朝を築くに至った。この王朝は、1230年に滅ぼされるまで存続した<sup>26)</sup>。

上の記述は大まかな筋である。ペルシア語原文は石版刷りでおよそ4ページにわたり、Ouseleyが*Biographical Notices of Persian Poets*で英訳した部分はかなり要約してある。この話で重要な点は、事件がペルシア(イラン)で起こったこと、インドと海路による交易がなされていること、猫が鼠を退治し大活躍して主人公が富貴となる原因となったこと、この話では貧しい老婆が主人公であって、その幸運のおかげで息子(カイス)が王朝を樹立するほどに力を蓄えたこと、これらの要因を記憶しておく必要がある。先ほどの『大蔵経』の話と異なるのは、富貴の直接の原因が死鼠であったのに対し、ここでは猫である。もちろん、生きた猫である。この点は、Whittingtonの話に近い。また、この話では、主人公が誰かから運命の開ける箴言を聞くという要素がない。また、息子たちは母親の幸運以前にある程度自立して生計を立てていた。さらに、主人公が老婆であるから、最後に結婚することもない。熊楠がこの話を『大蔵経』と結びつけたのは大胆な試みであったかもしれない。というのは、彼が立論のために用いた資料の大半はヨーロッパ人旅行者の記録であるからである。当事者である現地人の直接的な記録はほとんど用いられていない。この点は「考察」で詳論する。

#### (4) イスラームにおける猫の位置

イスラーム教徒が猫好き(熊楠は、「好遇」と述べている)であることを証明するために、熊楠が「猫」で用いた話は三つある。一つは、猫は犬と異なり、人前で性行為をしない(A. G. Busbequis, *Travels into Turkey*, London, 1744からの孫引き)。二つ目は、預言者ムハンマドが礼拝前に自分の衣服の袖のところで寝ていた猫を起こすのを嫌って、袖を切って猫を寝かせたまま礼拝に出かけた、とい

う話。最後は、*The Travels of Martin Baumgarten*（Churchill からの孫引き）にある、シリアのダマスカスでは人々が猫を非常に大切に使う話である。これはムハンマド（マホメット）がここ（シリア）に住んでいたときに「常に袖中に猫を安置し、これを撫で養い愛せり、けだし猫の所為を觀て自分の動作を制せしなり」従って、イスラーム教徒はこれに倣って、進んで猫にえさを与えて崇拜したのだ、という。熊楠は同時に、エジプトからの影響についても触れている<sup>27)</sup>。

この中で、最初の話について、イスラーム教徒が犬を嫌悪することは事実である。猫については、結論から言うと、あくまで大嫌いな犬との比較の話であって、必ずしも猫が好きということではない。この点は、後述する。二番目の話は、預言者の伝承に見いだすことができない。比較的新しい時代の主として西洋人の記述には必ずと言ってよいほど、この話は出てくるものの、事実ではないという説が有力である。また、平岩米吉の『猫の歴史と奇話』では、ムハンマドが猫の宙返りの動作に興味を示したことからイスラーム教徒の間では、「かなり広い地域で猫が優遇されていた」という<sup>28)</sup>。しかしながら、この記述に関して出典は明らかにされていない。最後の話は、ムハンマドがここ（シリア）に住んでいたということ自体が奇妙な話である。570年代の後半に孤児となって、叔父の指導で交易を学んでいた頃から成人するまでの期間のことであろうか。とすると、彼が預言者として啓示を受ける前のことになる。おそらく Baumgarten は、シリアの人々が猫をたくさん集め、そこでえさを与える施設を見たのであろうが、イスラーム教徒の猫好きに結びつける有力な証拠にはならないと思う。確かに、シリアとエジプトは伝統的に深く結びついていたので、古代エジプトの猫崇拜と関連があったのかもしれない。

では実際にイスラーム教徒の記した文献に猫はどのように現れるのか。まず、預言者と彼の教友の関する伝承（ハディース）を見る。伝承は四大法源といわれ、イスラーム法（シャリーア）の基盤の一つである。シャリーアはイスラーム教徒の信仰、行動を規定する基本的な法であり、ほぼ10世紀頃に現在の形が整えられた。シャリーアは神与の法と見なされる不易の法である。これは原則イスラーム教徒の生活全体を規定するルールであって、ある意味イスラーム教徒とはシャリーアを実践する人であると言ってもよい。実は、熊楠は「ロンドン抜書」の中



ただ、熊楠はこの箇所を別の書物で見だし孫引きしたようである。さらに、「猫」では引用していない<sup>29)</sup>。

ここでは、猫が飲んだ水が不浄かどうかについて、ムハンマドの愛妻アーイシャが猫が水を飲んだ器から食物を食べた話に関連して、猫が飲んだ水は不浄ではない趣旨のことが書き記してある。この内容は、イスラーム法の最重要情報源となる「預言者の伝承 (ハディース)」に残されたものなので、信憑性がある (以下でやや詳しく紹介する)。ただし、上でも少し触れたように、この種の話はイスラームで一般的に犬が毛嫌いされる中で、それとの比較の上で (犬より) 「不浄でない」という意味であって、猫が清浄で愛すべきであると積極的に言っているわけではない。

イスラーム全般では、特に猫が愛すべき動物であるという決定的な証拠はこれまでの所見いだすことができなかった。一般に、猫は神が創造した生命を持つ愛すべき生き物の一つとして捉えられている。無論、猫以外の動物も愛情を持って接することが勧められる。さらに猫は、鼠、サソリ、カラスなど人間に害を与える動物、生物を捕まえるので、重宝されてきた。『ペルシア史』や「Whittingtonの物語」などにも記されているように、商人たちが海の旅に猫を鼠対策として連れて行くことは普通であったといわれている。このように猫はイスラーム世界でも「益獣」と見なされていたようだ。

ところで、「猫」論文で決定的とも言える重要な根拠を提供した話はペルシア (イラン) での出来事である。従って、ここでいくつかの資料に基づいてイラン人の間で猫がどのように扱われてきたのか見てみよう。

いま一例としてサファヴィー朝 (1501-1722) 後半、宗教学者、指導者として幅広く活躍し、シーア派の聖者イマームに関する伝承を集めた百巻を超える大著、『光の海 (*Bahr al-Anvār*)』を著した、マジュリシー (Mollā Mohammad Bāqel Majlisī) による *Holliyat al-Mottaqīm* (『敬虔の現われ』) を見てみよう。この書物は、17世紀頃までにイラン人の間で信じられてきた俗信、迷信などをシーア派イスラームの霊的権威イマームの伝承に基づきコメントを加えたものである。その中で「動物を飼うことについて」「犬を飼うことを禁じることについて」<sup>30)</sup> (pp. 263-270) 「様々な動物に関すること」 (pp. 285-288) という項目がある。家禽、特に

鳩 (kabūtar) 鶏 (khorūs) については、預言者が奨励し子供たちに害もないことから問題はないとされる。最初の項目では、事細かに鳥類に関する記述がなされている。イスラーム教徒の鳥に関する関心の深さがうかがえる。いま問題になるのは四足獣である。ムハンマドの最初の関心にあったのは羊と山羊である。たとえば、6代目イマーム、ジャファル・サーデク (699-765) は羊を飼うことの恵みを認める預言者の伝承を承認している<sup>31)</sup>。一方、犬はイスラームでは不浄な動物として知られ、忌み嫌われている。狩りや牧羊犬としては飼うことは問題ないとされるが、後述するように、犬の飲んだ残りの水は不浄であるとして、礼拝前の清めに用いることは許されない。この点で上の猫の場合とは異なる。

「様々な動物に関すること」では、様々な動物に関してそれぞれの特徴が述べられている。たとえば、ウサギ (khar gūsh) は自分の夫に奸計を企み、生理や夢精の際洗浄しない、また鼠 (mūsh) はユダヤ人の仲間であって、神は彼らに怒りを下される、などの記述がある。後者については、短い記述ではあるが、イスラーム教徒の間で鼠は確かに嫌われていたことがわかる。ただ、イスラームではユダヤ教徒もキリスト教徒同様、「経典の民 *ahl al-kitāb*」であって、イスラーム教共同体で居住することには何ら問題はない。上記の項目に出てくる動物を見ると、鳥類はともかく、四足獣については以下の通りで、その中に猫は入っていない。すなわち、ライオン (shīr)、牛 (gāv)、ゾウ (fil)、yūz、駱駝 (shotr)、馬 (asb)、狼 (gorg)、ジャッカル (shaghghāl)、犬 (sag) ロバ (khar)、ガゼル (āhū)、サイ (kargadān)、豹 (palang)、兎 (khargūsh)、熊 (khors)、sohīl (不詳)、猿 (meimūn)、khok、鼠 (mūsh) である<sup>32)</sup>。ちなみに中世以来イスラーム教徒の間で読まれた『創造の不思議 ('ajāyeb al-makhlūqāt)』を参照しても<sup>33)</sup>、山猫に関する記述は見られるが、家庭で飼われる猫 (イエ猫) の記述は見られない (図3)。

一方、サーデク・ヘダーヤット (Sādeq Hedāyat, 1903-1951) 『欺きの園 (Neirangestān)』<sup>34)</sup> には、猫に関する記述が見られる。ヘダーヤットは近代イラン文学を代表する小説家で、カフカの影響を受けながら近代イラン社会の抱える内面的問題に関する作品を発表した。この人物は、反イスラーム的人物として知られ、イラン人のアイデンティティーの根拠をイスラーム以前の古代イランの栄光に求めた。『欺きの園』第18章『家畜と獣』で、幾種類かの動物についての記



تصویر کربه دشتی (沙漠ネコ, ヤマネコ)

図3

述があり、その中に猫に関する記述がある。それによると；

- ① 犬と猫の血は凶兆である
- ② 猫が門の前で手で顔を洗えば、来客がある
- ③ 猫が手で顔を洗えば、「金持ちになったら、肉を手にかけてやる」と言う。  
そうすれば、必ず金持ちになる。
- ④ 猫がある人の前で自分を掻けば、その人に悲しいことが起こる
- ⑤ 死んだ猫は家の壁越しに外へ捨てなければならない
- ⑥ 猫に水をかけると、手の甲に疣ができる
- ⑦ ライオンがくしゃみをした拍子に、猫が鼻から生まれ落ちた。それで、猫は  
高慢である。
- ⑧ 黒猫はジンである。それを傷つけたら癲癩になる
- ⑨ 猫に食べ物を与えるとき、「神の名において」と言わなければならない。あ  
の世で猫に「神の名において」と信仰告白させるためである
- ⑩ 猫は家に馴染み、犬は飼い主になれる

- ⑩ イマーム・アリーが猫を可愛がり、手で背中を撫でた。そのため、猫は決して背中を地面につけない。

以上の11の猫に関する言及が見られる。日本人にもなじみのある内容が見られるが、概して猫に好感を示す項目はない。世界中で、猫はその気まぐれ、媚を売るなどの性質から魔性を持つ動物とみなされ、嫌われてきた一面がある。その中で、注目すべきは⑩であろう。イマームとはシーア派信仰において中枢の位置を占める霊的指導者のことで、特に初代イマームのアリーは格別の位置を占める。この人物がいなければ、シーア派信仰そのものがあり得ないわけであるから、彼に対する信者の尊崇は並外れたものである<sup>35)</sup>。そのイマームが猫を可愛がったのであるから、この点を考慮すれば、確かにイスラーム（ここでは特にシーア派）では猫は愛すべき動物と考えられていたといえる。ただ、おそらく、これは猫が背中を打つことなく敏捷に着地する性質を表したものであると推測できる。

それでは次にイスラーム法的に猫はどのように理解されているのか見てみたい。シーア派ではイスラーム法（シャリーア）の基本をなすものが『諸問題の解説（*Tawzīh al-Masā'el*）』で、すべての学僧は最高レベルの宗教学者（モジュタヘド）として認定されるために、いわば博士論文のようなものとして法学的判断に関する自己の見解を書物の形で明らかにする必要がある。シーア派宗教学者によって発表されたほとんどすべての『諸問題の解説』は、ほぼ同じ内容を持つ。ただし、いくつかの問題に関しては、それぞれの学者特有の判断が下されることがある。猫に関して、たとえば、ホイー（*Hājī Sayyid Abū al-Qāsem al-Mūsavī al-Kho'ī*）『諸問題の解説』問題番号56には、

犬や豚、あるいは経典の民でない（*gheir ketābī*）異教徒（*kāfer*）についても、その食べ残し（*nimkhordeh*）は、必要上の注意として、不浄（*najes*）であり、それを食べることは絶対禁忌（*harām*）である。肉が絶対禁忌である動物の食べ残しは、清浄である、そしてそれを食べることは、猫は別にして（猫なら良いが？）、忌み嫌われる（*makrūh*）<sup>36)</sup>。

また、同じくイスラーム中世におけるシーア派の大法学者、ヒッリー（*Muhaqqiq*

Hilli) による『イスラーム法 (*Sharā'ye al Islām*)』では、犬も猫も共に飼われていても (ahlī)、野生であっても (vahshī)、絶対禁忌である、と記してある。しかし、翻訳者の註によると、まず犬について書かれた後で、猫に代えて豚について述べたのである、という。その理由として、犬と豚が絶対禁忌であることは了解事項であり、猫については(分類が異なり) 孳猛な動物 (sobā') として扱っていることから、同じ範疇の動物でないことが明らかであるからだという。孳猛な動物というのは、爪を持った動物で、ライオン、豹、パンサー、狼などであり、弱いものとしては、狐、ハイエナやジャッカルなどがいる。どうやら猫はイスラーム教徒の間では、どう猛な動物に分類されていたらしい<sup>37)</sup>。おそらくこれは家猫ではなく、山猫であると推測できる。

猫が概して魔性を持って見られたことについては触れた。熊楠は『南方隨筆』の「猫を殺すと告て盗品を取戻す事」において、「トランシカウカシアのオツセテ人」の間で猫が呪いに用いられる事例を紹介している<sup>38)</sup>。これは平岩の記述でも同様である。古代エジプト同様、猫の瞳の形は光の強弱に応じて変化することから神聖と見なされた。しかしながら、平岩によると、中世のヨーロッパにおいて、猫は魔女の迷信と結びついた結果、神聖は剥奪され、魔物として扱われることになる。それは18世紀まで続いたと言われている。

次にスンナ派の伝承集 (ハディース hadith) を例にとってみると、ブハーリー (al-Bukhārī)、ティルミズィー (al-Tirmidhī) などにおいて、予言者の言葉として、「それ (猫) は不浄ではない。それは私たちが世話して生活する生き物の一つである。」といわれている。この言葉が発せられた状況は、次の通りである。Ka'b の娘 Kabshah という女性は義理の父親 Abū Qatadah が礼拝の清めを行うための水を器に注いだ。そこへ猫がやってきて、水をほしがった。そこで Abū Qatadah は猫に水を飲ませるために器の向きを変えてやった。彼は Kabsha が不思議そうにしているのに気づいて言った;「アッラーの予言者は猫について『それは不浄ではない。それは私たちと一緒に生活する動物の一つである』とおっしゃったのだよ。」<sup>39)</sup>

この伝承を巡っていくつかの意見がある。第一の意見は、預言者がこのように言ったのであるから、水は不浄ではないという立場である。すでに上で紹介したように、預言者の妻アーイシャが猫の飲んだ水を不浄と見なさなかった、という

伝承もある。これに対して、ハナフィー派の公式の法学的立場によると、(猫が飲んだ)水は不浄である、しかし不浄の度合いは低いと考える。そのような水を礼拝の清めに用いることは好ましくないが、禁じられることはないという立場である。この学派では「もし猫が皿から水を飲めば、一二度洗えば清浄になる」という伝承を引用する。

猫が飲んだ水が清浄かどうかに関する伝承の問題点は、果たしてこれが真に預言者の言葉にたどれるか、という点である。一般にこの議論は犬が飲んだ水に関して行われるので、猫はあくまで二義的であると考えられていることである。イスラームで犬が忌避されていることは明らかで、熊楠も知っていた *Mishkat al-Masabih* の「清め」の章で犬の不浄さを述べている。ただ、*Mishkat al-Masabih* では、動物や野生の動物がよくやってくる水場の水についても、水汲み用の容器二杯分以上の水量があれば不浄ではないとか<sup>40)</sup>、信者の持ち物である容器の水を犬が飲んでも七回洗えば清浄であると預言者が述べた、とも言われている<sup>41)</sup>。また、Hilli に関して述べたように、犬は牧羊犬としては重要なので、ムハンマドはこの目的のために犬を飼うことは禁じていなかった。現在のイランでは、若い人々の間で犬を飼うことが行われている。これについてシーア派最高権威の一人シーラージー師が欧米の習慣を模倣するものであるとして非難宣言を行っている。一方、猫は基本的にどうでも良いという態度である。いずれにしても、犬はイスラームで非常に嫌われており、猫は清浄であるとはいっても、印象としては犬との比較においてであるようだ。同様の事例は、少し上で紹介したシーア派の事例で、豚との対比で猫のほうが「ましである」という扱いを受けていた場合にも見られる。

上記の伝承の意味を巡ってイスラームの法学者によって行なわれてきた議論には、まだ複雑な争点があるようだが、以上ではほぼ要点は述べた。本稿においてさらに深入りしてもあまり意味がないようなのでこの辺でやめる。

このように見てくると、全体としては必ずしも猫が積極的にイスラーム教徒に好まれていた事を示す伝承がなく、犬や豚などに比べた場合好意的に見られていたことがわかる。熊楠はすべてヨーロッパ人の手になる旅行記や記録について、死鼠がイスラーム世界を通過して猫に変わったという興味深い仮説を立てたが、この点について次節で若干考察することが必要である。

## (5) 考察

以上、「猫」を巡る状況について考察を行う材料が大体整ったと思う。以上で述べた「猫」論考をめぐる議論のポイントをまとめると；①ヨーロッパで Whittington 物語について関心が高かった、②数ある研究の中で Keightley の *N&Q* 誌上の記事やクラウストンの *Popular Tales and Fictions* が重要であって、熊楠はこれらの文献に関心を示していたが、クラウストンの書物は格別に重要であった。③その理由は、ロンドン滞在期間に本格的に資料収集に取りかかった民俗学的関心と関わっている（「ロンドン抜書」）、④帰国後、那智滞在期間さらにそれ以降にクラウストンや『大蔵経』などを広範に読み漁り、比較民俗学的方法論が打ち立てられる途上にあっただが、「猫」の準備もなされていたと思われる、⑤同時に、「燕石考」など「自信作」をまとめたが、ネイチャー誌、サイエンス誌に採用されることもなく、学問的には失意にあった⑥転機は思わぬ所から訪れた。「神社合祀問題」との関わりで柳田国男との文通による交際が始まり、「猫」によって全国誌上での進出を果たすことができた。⑦「猫」執筆の主要な目的は、上記クラウストンの著作にある Whittington 譚のルーツがインドにあることを「伝播説」に従ってさぐることである、⑧この話のヨーロッパでの流布状況、イスラームコネクション (Sir Gore Ouseley)、インド起源に関する仮説など、論考の大筋はほぼすべてクラウストンによって準備されていた、⑨熊楠はクラウストンの提示した仮説の大元になっているこの話のインドルーツを『大蔵経』の鼠金舗主の話に見い出した、⑩仏教の話が形を変えて現行のヨーロッパの Whittington 譚となって伝わったことは疑いを入れず、イスラーム教徒がこの話を取り扱ってからそのようになったのであって、イスラーム教徒は仏教徒が嫌悪する動物、猫が非常に好きで、鼠と取り替えてしまったからである。さらに、主人公が最初貧しく惨めであり、動物を売って航海を行うことで巨大な富を得たこと、さらに最初は不親切であった主人の娘と結婚する、などの共通点がある、というのである。

確かに Whittington の話と鼠金舗主の話は物語の組み立てが近似している。直接『大蔵経』からの影響か『ジャータカ』など、他の文献の影響かどうかの判断は筆者にはできないが、後のイギリスとインドの関係を考慮すれば、蓋然性はか

なり高いかもしれない。この話が北回りか南回りかいずれの経路で伝わったかは、イギリスでの Whittington 譚成立の時期が判明すれば、ほぼ推察できると思う。

問題は死鼠が猫に変わった過程について下した熊楠の判断である。本稿では、そのほかの資料に比して熊楠のイスラーム関係資料の扱いがやや不注意である点、特にヨーロッパ人研究者、旅行者、外交官の記述を安易に受け入れている点を指摘したい。一例を挙げると、クラウストンは Sir Gore Ouseley の *Bibliographical Notices of Persian Poets* からイスラームコネクションを示す資料を引用しているが、Ouseley の翻訳は大筋では正しいものの、抄訳に過ぎない。細部において異同が見られる。たとえばカイスは母親をシラフに残して兄弟と共にカイス島に移るが、そこでの生業は漁師で大変苦しい生活であった。ペルシア語版では、カイスが一王朝を打ち立て繁栄したことが要点であって、母親は特に重要ではない (Keightley は Whittington 譚でペルシアの話だけが史実であるとして、他はすべて作り話であるとする)。また息子たちは母親の「成功」以前にある程度自立していた。さらに、ペルシア語版では、インドの王が動物の名を知らないので商人が教えるとき、ペルシア語でゴルベ (gorbeh)、アラビア語ではシンナール (sennawr) であると述べていて、インド人が猫を知らない様子がうかがえる<sup>42)</sup>。一方、『大蔵経』では、死鼠が「柱につながれた」猫のえさとなる。熊楠は N&Q の翻訳ではご丁寧に Now the keeper of the cat appeared , and after a brief bargaining with the lad bartered two handfuls of pease for the dead rat, with which to feed his pet animal. (下線筆者) と訳している<sup>43)</sup>。仏典では「童子取鼠詣大市中。見有飢猫繫頸於柱。以鼠示之。」<sup>44)</sup> となっており、確かに猫は頸を(紐か何かで)くられて)柱に繋がれている。「はじめに」で少し触れたが、熊楠の飼猫はナメクジ駆除の助っ人であったように、猫は元来益獣として、鼠、蛇、サソリなどの生き物から人間を守る役割で飼われていた。昔船乗りたちが航海に出かける際、猫を鼠などの害獣対策に連れて行くのは普通のことであった。我が国では、平安時代に猫は単に役に立つという理由だけではなく、ペットとしても飼われていたらしい。放し飼いが普通であったようだが、平岩によれば、『源氏物語』に、なつかない猫が綱で繋がれているという記述があることを紹介している<sup>45)</sup>。いずれにしても、ペルシア語版ではインド人は猫を全く知らないのに対して、『大蔵経』では猫が「飼

われて」いる。もちろん猫は主役ではない。

猫の原産地はエジプトあたりと考えられているので<sup>46)</sup>、猫伝播の経路から言えばペルシアのほうが古い（アケメネス王朝時代（紀元前 500 年頃）という）。インドに家猫（イエネコ）がもたらされたのもほぼ紀元前 500 年頃であろうと言われる。中東の商人たちがもたらしたという。しかし、インドにはかなり昔から猫がいたという説もあるので、一概には言えない（既住の山猫だと思われる）。ヨーロッパには 2 世紀頃には家猫の存在が確認されるらしいが、これはローマ人のエジプト支配との関係があるらしい。イギリスの交易の拡大に伴う外部世界、特に中東やインドなどの文物の流入が著しくなるのは 16～17 世紀頃と考えるのが常識的であろうから、イギリス本国での Whittington と猫の話の初出が 160？年というのはうなずける。

少し話が脱線したが、それではイスラーム世界で「猫がことのほか好まれていた Their particular fondness for the cat」と言えるのだろうか<sup>47)</sup>。(4) 節で解説したとおり、「猫」の論旨から言って、この点はきわめて重要である。この論考のおもしろさの一つは、死鼠がイスラーム世界を経過することによって、猫に変わったという点にある。クラウストンや熊楠は明らかに文化の伝播説を信奉しているので、イスラーム教徒が猫好きでないことがわかれば、論考自体の根拠が薄弱となる。

本稿では、ペルシア（イラン）を中心に、イスラーム世界における猫の位置付けを調べてみた。その結果は必ずしも熊楠が考えていたように、イスラーム教徒の猫好きを積極的に証明する証拠を見出すことはできなかった。熊楠がこのように考えた原因は何か。それは熊楠が西洋人の記録を比較的無批判的に取り入れたからである。同時に、これは世界規模での文化伝播説を立論・証明することの困難さを物語っている。すでに触れたとおり、この問題は大きすぎるので本稿ではとて扱うことができない。ただ、有名な熊楠、柳田の路線論争で知られる大きな、しかも重要な問題群を含んでいることは明らかである。

とまれ、イスラーム世界における「猫」の位置をもう一度まとめると以下のようになる。イスラーム教徒全般について言えば、犬が毛嫌いされていることはよく知られている。たとえば犬が飲んだ後の水は七回洗浄しなければならないが猫は一～二回でよいというような、事例がある。また、予言者ムハンマドの愛妻アー

イシャにまつわる事例では、明らかに猫は不浄視されていないように見える。ただ、宗教学者ヒッリーで示した事例もないわけではなく、猫もあまり清浄とは見なされていなかったようだ。イランの事例などで明白のように、一般に猫に対する関心は高くなく、印象としては犬などと比べて清浄であるようだが、積極的にイスラーム教徒が猫好きであるという証拠は明瞭ではないことがわかった。犬ですら、猟犬などとして認められているのだから、それなりの「益獣」としての位置づけがあった。繰り返すが、ムハンマドが猫好きであったかどうかはともかく、イスラーム教徒が猫好きという話はあまり信憑性がないようである。

## (6) 結論

熊楠の比較説話学的、民俗学的論考を現在の情報過多の状況下にある我々の立場から批判してもあまり意味はない。ただいくつかの点を指摘することはできるだろう。まず、「猫」論考のポイントは『大蔵経』の記述の発見である。それを単に事実として示すだけでなく、熊楠は Whittington 譚の起源であると解釈した。ヒントはクラウストンによってある程度与えられていたとはいっても、これは大胆で興味深い仮説であった。19世紀から20世紀初頭の時代の反映ではあっても、世界を繋ぐ巨大な視野がそこには前提されている。問題は、論証の過程で、①西洋人の旅行記、学説を比較的無批判に受け入れているように思われること、②その結果、イスラーム教徒の事例などで正確な考証が必ずしもなされていない点を指摘しなくてはならない。あえて熊楠の弱点を重箱の隅をつつく思いで探しているのではない。「猫」の論証においてきわめて重要な位置を占めるはずの地域に関する事例が、欧米人の旅行記の記述から「安易に」取られているように感じられたので、指摘したのである。もちろん、これとて今の私たちから見て、揚げ足を取っているのかもしれない。

熊楠の論考をこれまでになく丁寧に読んでみて感じたことは、迷路に入っていくように次から次へと新たな調査の対象が出てくることである。いつまでたっても終わることがない。ただ、百年以上経過した現在の私たちが熊楠の論考を再読し、再考してみて、これほどまで本気にさせるこの力は驚きである。いまだに新

鮮な知的好奇心を喚起させてくれる。猫一疋でこれほどの時間と労力を使わせる  
とすれば、残された多くの論考を同じように調査すればどれほどの時間と労力を  
必要とすることやら、想像がつかない。熊楠の知の世界は、やはり「おもしろい」。

## 註

- 1) たとえば、『南方熊楠日記2 1897-1904』（株）八坂書房、1987、1898 1月16日、  
4月29日、6月9日、7月10日など、熊楠はロンドンの猫に関して、簡潔だが時  
に細やかな観察をしている。
- 2) 南方文枝『父 南方熊楠を語る』、日本エディタースクール出版部、1981、p. 30.
- 3) 『高山寺蔵 南方熊楠書簡 土宜法龍宛 1893-1922』藤原書店、p. 255.
- 4) 熊楠の描いた猫の戯画は土岐法龍への書簡や日記、葉書などに見られる。本文中  
の猫の絵のほかにも、『高山寺蔵 南方熊楠書翰 土宜法龍宛 1893-1922』藤原書店、  
p. 82、ロンドン時代の書簡並びに『南方熊楠 土宜法龍 往復書簡』八坂書房、  
p. 250、和歌山那智時代においても、進化進化と人々がいうのに対し、退化という

こともあって、「猫  
の足[a]に比して人  
の足[b]この間には  
なはだしく退化  
じゃ。されど、退化  
したればこそ直立歩  
行もできる。」と述  
べて、猫の足を例に  
とって退化の効用に  
ついて述べている。

同じく那智時代に  
「影応論理（アノロ

ジー）」について述べ、人間世にある  
のは影応論理だけであって、符号とい  
うことは一つもないという。同じよう  
な猫でも「ならべて見ればどこかわ  
る。図のごとく、眼のすわり様、頬の  
ふくらし様など、どこかがかわるもの  
なり。」猫好きの人間にしかわからな



図4



図5

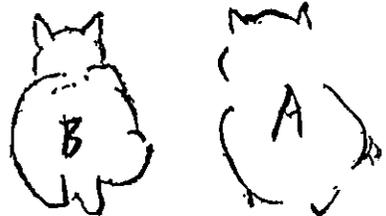


図6

「小春日や 猫が鼠をとるところ」とある



南方熊楠自筆

熊楠

図7 純米酒「熊楠」のラベル

い説明法で、猫に関心のない人にはほとんど意味をなさない解説である。今一つは、『殷歴書』に見られる絵で、sketch (A) と outline (B) の違いを説明している。また、その他の例として熊楠の実家の酒造、「世界一統」の商品にも猫の絵が貼ってある。このほかにも多くの事例があるが、熊楠がどれほど猫が好きであったのか示す証拠になるだろう。ただ、反例もないわけではなく、熊楠が生まれたばかりの猫を天神崎に捨てたことがある、という話を聞いたことがある。

- 5) 飯倉照平編『柳田国男・南方熊楠往復書簡集』上・下、平凡社、1994、大半は上

巻に含まれる。柳田に校正を依頼している箇所は、『太陽』ではなくまだ『考古学雑誌』に出すと言っていた頃の明治44年10月6日、さらに、ほぼ『太陽』に出すことが決まっていた10月25日にある。前者では「……貴下の御手で御校正下されたく候」（p. 172）、後者では、いくつかの条件を付した上で、「……なるべく貴下の御校正を経得ること前方に承諾候わば、御出し下され様御頼み申し上げ候。」と述べている。また、熊楠が本心から『太陽』のような「俗」な雑誌の読者は自分の論文など理解できないと上から目線で考えていたのか、それとも実はあまり自信がなかったのか、微妙なところである。筆者は柳田とのやり取りを見てみて、確実に論考が出してもらえる『考古学雑誌』を主張したのであって、『太陽』に掲載されないことを恐れたように読める。

- 6) 『南方熊楠随筆集』、筑摩書房、1974、pp. 118-132.
- 7) 鈴木董、「熊楠先生の博識の源泉『十二支考』に見えたる非漢字圏文献の引用を論ず」『現代思想 特集 南方熊楠』、pp. 113-121、青土社、1992、これを見ると熊楠が強い関心をイスラーム世界に示していたことが分かる。ただ、鈴木も指摘するように、熊楠のトルコ人に対する評価は現在の研究者から見て、かならずしも納得させるものではないようである。
- 8) ヴァンベリー、杉本正年、小林高四郎訳、『ペルシア放浪記』、平凡社、1965.
- 9) 南方熊楠、「猫一疋の力に憑って大富となりし人の話」（以下「猫」）、『南方熊楠随筆集』、p. 145.
- 10) 増尾伸一郎、「南方熊楠の比較説話研究と W. A. クラウストン—“Popular Tales and Fictions”の受容をめぐる」、『南方熊楠とアジア』田村義也、松居竜五（編）勉誠出版（株）、p. 170.
- 11) 上掲論文、p. 170.
- 12) *Notes and Queries*, 1861, April.
- 13) 「履歴書」『南方熊楠随筆集』、p. 26.
- 14) 『柳田国男・南方熊楠往復書簡集、上』、p. 92.
- 15) 「日記」『南方熊楠全集』、p. 378.
- 16) 「猫」、p. 147.
- 17) 増尾、上掲論文、pp. 166-167.
- 18) 南方熊楠、*N&Q*, 1911年12月30日号。
- 19) 義浄訳、『大蔵経』、高楠順次郎編、大正新脩大蔵経刊行会、大蔵出版株式会社、1989.
- 20) 菊池淑子訳、『カリラとディムナ、アラビアの寓話』、平凡社、1978年、さらに、Kalilah va Dimnah, tr. by Abu al-Ma'li Nasrullah b. Muhammad Manshi, 1389, Qom,

『ジャータカ』では、ペナレスで生まれた菩薩（職業は小出納吏 Treasurer Little）は星の位置から若者が死鼠を元手に事業を始め、妻を得るとお告げを受ける。事態はそのように展開し、一人の若者がこの出納吏の言葉を耳にして富貴となる。最後に若者は出納吏に感謝を表明するために訪れ、彼の娘を妻として得る。

- 21) 南方熊楠「風一疋持って大いに富んだ話」『南方熊楠全集 6』、平凡社、1995、pp. 350–355、さらに飯倉照平『南方熊楠の説話学』、勉誠出版、2013、pp. 51–52、『全集 8』、p. 512 を参照。
- 22) Sir. Gore Ouseley, *Biographical Notes of Persian Poets*, 1846.
- 23) W.A.Clouston, *Popular Tales and Fictions*, 1887, pp. 65–78.
- 24) 南方熊楠、「猫」、p. 146.
- 25) Tārīkh-e Vassāf, また Keightley, *Tales and Popular Fictions*, Whittaker and Co., 1834, pp. 241–266 では既に 1834 年の段階で抄訳の不備を的確に指摘している。
- 26) 南方熊楠、「猫」、pp. 152–153.
- 27) 上掲書、pp. 152–153.
- 28) 平岩米吉、『猫の歴史と奇話』、築地書館、2010、p. 11.
- 29) 「ロンドン抜書」に、*Mishkat al-Masābīh* からの引用がある。筆者所有のものは、二巻からなり、預言者や彼の教友たちに関する言行の記録の集成である。預言者の伝承を必要十分に知ることのできる便利な書物である。Glossary 共で、1453 ページからなる。
- 30) Baqer Majlisi, *Holliyat al-Mottaqin*, pp. 263–270.
- 31) Ibid. p. 265.
- 32) Ibid. p. 286.
- 33) *Ketāb-e 'Ajāyeb al-Makhlūqāt va Gharā'yeb al-Mawjūdāt*, ed. Zakariya b. Muhammad b. Mahmud al-Makmūnī al-Qazvīnī, n.d. p. 418. 本書では、sinnur al-bar（陸猫）として現れ、砂漠にすむ猫で顔は家猫に似ているが体はそれよりも大きく、扱いが困難であるという。
- 34) Sadeq Hedayat, *Neirangestān*, ketābkhāneh-ye Amīr Kabīr, Tehran, 1342 (1964), pp. 138–141, 邦語訳、『ペルシア民俗誌』、奥西峻介、平凡社、pp. 252–255.
- 35) 嶋本隆光、『シーア派イスラーム—神話と歴史—』、京都大学学術出版会、2007、に詳しい。
- 36) Hajji Sayyid Abu al-Qasem al-Musavi al-Kho'i, *Towzih al-Masael*, Chapkhaneh-ye 'Ilmīeh, Qom, 1406, p. 11.
- 37) Mohaqqiq Hilli, *Tarjomeh-ye Farsi, Shara'yeh al-Islam*, 4 vols., Abu al-Qasem ibn Ahmad-e Yazdi, tr., 1308 (1970), vol. 3, pp. 1206–1209.

- 38) 『南方随筆』、萩原星文館、昭和18年、pp. 318-319.
- 39) *Mishkat al-Masabih*, vol. 1, p. 97.
- 40) *Ibid.*, p. 96.
- 41) *Ibid.*, p. 99.
- 42) *Tarikh-e Yassaf*, p. 171.
- 43) *N&Q.*, Eleventh Series.- Volume IV., July-December, p. 504.
- 44) 『大蔵経』、第23巻、p. 800.
- 45) 平岩、上掲書、p. 16.
- 46) 猫の起源に関しては、*Encyclopaedia Britannica a Dictionary of Arts, Sciences, Literature and General Information*, eleventh edition, volume V, Cambridge, 1910, 平岩上掲書、大石孝雄、『ネコの動物学』、東京大学出版会、2013.などを参照した。猫の起源は諸説あるが、結局世界各地に生存したヤマネコ類とイエネコの区別の問題が重要であるように思われる。本論において、エジプト産のアビシニア系の猫が古くから神聖視されていたという説、さらに、① 紀元前5世紀ごろペルシア軍がエジプトに攻め入った時に連れて帰った、② 同じく紀元前5世紀ごろ中東の商人たちがインドに猫をもたらししたという説が興味を覚えさせる。もちろんそれぞれの地域には、原産の体も数倍大きいヤマネコがいたのでここで「もたらされた」のは小型のイエネコであると考えられる。同様に、ヨーロッパ（イギリス）にも原産の猫はいたが、ローマ人の支配期にもたらされたのではないかと考えられている。ただ、やはり猫が「飼われた」基本的な動機はねずみなどの害獣の駆除のためであったようである。イギリスなどでイエネコが広範に普及したのは産業革命以降、特に19世紀以降ころではないかと思われる。この頃からアフガニスタン産の「ペルシア猫」がペットとして大流行するという。一説に、ロンドンには猫肉屋（猫の餌用の肉屋）があったという（今村与志雄、『猫談義』、東方書店、1986, p. 188.
- 47) 2014年11月20日から国際会議に出席するためにイランの宗教都市コムに出かけた。会議終了後、町の本屋や公園、その他の場所で猫談義をする機会があった。特にコムのマースーム廟脇の本屋では、数名の宗教学者を交えての討論を行ない、大変有益であった。基本的には事前調査との相異は余りなかったが、猫は犬に比べて清浄であるが、人間は神が創造し給うた物を動物であっても愛すべきであるとの原則が強調された。「ただし」と一人の宗教学者が言うには、猫の問題は水や食物との関連よりは、猫の毛である、という。猫の毛はよろしくないという意見であった。

## Minakata Kumagusu, Cats and Islam

Takamitsu SHIMAMOTO

It may be futile for modern researchers, based on abundant information available to us today, to criticize Minakata Kumagusu's works concerning comparative anecdotes and folklore for the lack of precision, but through the minute examination of his articles on afore-mentioned field of research, we can learn some facts hitherto not mentioned explicitly. "An anecdote of a man who has become of great wealth through the help of a cat ( *neko ippiki no chikara ni yotte taihu to narisi hito no hansai* )" is one of those. A minute re-examination of this article will reveal us some interesting points peculiar to Kumagusu; 1) as compared with Chinese or Japanese materials, Kumagusu seems to accept the information provided by the Westerners with sheer naiveté, 2) as a result, in this article the explanation of Islam, which should play a significant role in demonstrating his point of argument, may not be convincing to prove the point.

In this paper, the author makes an attempt to show some problems of Kumagusu in dealing with the documents, for instance, the travellers' narratives done by Western writers.